

戯作に見る土木工事

関西大学文学部教授 林 省之介
Shōnosuke HAYASHI

井 戸 堀

類焼に付て、田舎から井戸仕事師、大工など、大ぜひ来たゆへ、深さ五六尺の井戸をつもらせたれば、金子壱両でほりませふと云。安いものじゃから誂へたれば、庭へ川のように長くほるから、そふではない。井戸をほるのじゃといふたれば、かふほって、おつ立ます。
安永2年『口拍子』

実にたわいもない話であるが、江戸小咄に散見できるものはこの程度のものが多い。しかし、当時の技術からすれば、井戸堀とて立派な土木工事であった。

仙台堀は寛永年間（1624～44）に、伊達政宗の手によって、飯田橋より大きく直角に曲って、お茶の水から柳原土手を経て、浅草見附で隅田川に合流するように工事された運河である。深川の開発は元禄期（1688～1704）に至ってますます活発となり、仙台堀を堀り拡げて幅20間としたり、入堀・六間堀などの開削が完成した。

伊達家三代目の若き大守綱宗が幕命により、神田川堀割工事の監督に出向いたのは万治3年（1660）弱冠20才の時であった。

仙台堀といふべきを神田川 (七二・5)

其時の大守吉原雀なり (七二・27)

倭人が寄って吉原雀にし (六二・3)

倭人の張本人は、伊達兵部と原田甲斐だといわれている。工事の合い間に、綱宗に吉原の味を覚えさせ、放埒に走らせた結果が伊達騒動だといわれている。

高尾からはっきりわかる江戸の張 (一四・36)

大名がこはいものかと高尾言ひ (傍一・46)

仙様は大事の客と三浦いゝ (二三・37)

伊達少将も百夜ほど御通ひ (一〇三・17)

もてる手を汝知らぬか梶之助 (九六・40)

日本堤へ天笠の下駄で行き (一五九・29)

高尾まず近ふ寄れいが気にくはず (九七・37)

履物へ灸もすへられぬと高尾	(三一・19)
釣台で高尾へおくるしのぶ擢り	(四・5)
大名がこわひものかと高尾いゝ	(傍一・46)
山を割る威勢の客をふり通し	(二六・10)
堀わりも下水の方がようざんす	(八九・31)
未来にて高雄浮世に礼をいひ	(五二・32)
大名のはだしになるも浮世也	(四五・24)
傾城をやけで請出すむごい事	(一〇・30)
泪ぬぐいさあ秤に掛けなんし	(一五・32)
数千両出してしぶとい物を買ひ	(一三・12)
素股成りともと三股迄くどき	(明四・智6)
あい嫌でありんすを聞き抜きはなし	(一四・42)

吉原随一の名妓と言われた、高尾太夫と綱宗とのかみ合わぬ恋は、以上のように展開する。そして『塵塚談』には、

仙台侯、三浦屋の高尾を身請し召し連れ賜ふに、申し合せし男へ操を立て、侯に従はざりしかば、浅草川三派に於て、船中よりさげ截りにし賜ふ。あまねく人の知れる事也。

と、かくして、

千金の紅葉を伊達なずんど切	(四六・6)
---------------	--------

世にこれを仙台高尾の吊るし切りなどと言う。勿論これは巷説と実説の入り乱れた、江戸庶民の創造的事件であったが、果してこの結末はどうなりますことやら。